

2018.11.28 遠藤清賢

法然とキリスト

「井上洋治著作選集」8巻

「法然(イエスの面影をしのばせる人)」を読んで

盛岡の善隣館書店に井上洋治著作選集が置かれていました。その中で5巻から9巻までを購入しました。私にとっては大きな出費で今月は節約をしなければなりません。故井上洋治神父は故遠藤周作氏の親友です。遠藤周作の著作の中に友人として井上洋治神父が出てきたことがきっかけで知るようになりました。この選集の3巻に「キリストを運んだ男」という著作は確か20年位まえに単行本として出版され購入して読んだことが有ります。今回選集が出されたことを私は非常にうれしく思います。8巻の法然に関しての著作が有り、梅原猛の「法然の哀しみ」という本をこれも20年位前だったと思いますが購入し読んだことが有り、その時からなにか法然について心に残っていましたが、今回の井上神父の著作でその理由がイエスキリストとの共通性にあったことがわかりました。

井上洋二神父は法然とキリストを比較しその共通点を私達に教えています。両者に共通していることは人間の救済についてですが、特に社会的に弱い立場の人たちや、当時の男尊女卑の社会での女性たちの救済について共通点があることを教えてくれています。それは全ての人間は神様、仏様からみれば全て同じであるということです。神様を信じ、信仰をもって生きている人たちは平等に神様の救済に授かることが出来る。また、仏教についての南無阿弥陀仏という念仏を心から念ずれば人は等しく救済されるということに於いてイエスキリストと法然は一致していることが確認できるということです、当時ユダヤ教では律法を学び、それを守ることが神の救済をうける必要条件となっていました。それが出来ない人たちは汚れた人たちであり神の救済から外れている人たちとされていました。したがって律法を学ぶことが出来なかった人たちや女性たちは汚れた人たちとされていたのです。同様に仏教においても厳しい修行を行い、切磋琢磨することによって救済の道は開かれるとされていました。当時の女性たちは生まれつきその救済からは外れているとされていました。キリストも法

然もこれに対して否と唱えています。しかし、修行を積むことや律法を学びその学びを深めることはキリストも法然も大切な事としていますが、しかし、神様も仏様もその救済に於いては人を選ばず、平等に天の道も極楽浄土の道も開かれていることを伝えています。それが愛の神であり、仏の慈悲なのだという教えです。これによって当時の律法学者や仏教団体から断罪され、キリストは十字架に付けられ、法然は島おくりの刑が執行されたのだそうです。

律法学者にとってイエスの行動は受け入れられるものではありませんでした。自分たちが汚れている者と断罪してきた人々と共に食事をし、語り合い、とくに汚れた者として律法学者にとって許し難い娼婦たちの罪を許すなど、決して受け入れられるものではなかったのです。法然にしても、何の修行もしないでただ一言念仏を唱える人は誰でも救済されるということは、困難な修行を行い、自分を高めることで救済の道が開かれると信じている僧侶たちには、受け入れられない事でした。しかも、男尊女卑の時代に合って、女性も神様、また仏の救済に与ることが出来るという教えは全く許しがたい物だったのだと神父は言っています。法然の教えは多くの人たちに受け入れられましたが、ただ一言念仏を唱えれば救済されるということで、罪を犯しても念仏を唱えれば地獄に落ちることが無く、再び罪を犯してもまた念仏を唱えれば良いと考える人たちが現れたのです。これは法然の意図したことではなく、念仏を唱え、希望をもって罪を犯すことなく新しい人生を歩むことに努力することが法然の意図したことでした。これによって法然は自分の教えが本当に人々の救済になるのかどうか悩んだ人なのだと私は思います。イエスキリストも信仰を持てば、それだけで救われるということではなく、信仰を持って生きる真の生き方を探求することを求めているのです。従って、毎週1度の礼拝を守り、神との応答することが私達クリスチャンには求められているのだと思いました。人間の浅はかな欲望によって、自分の都合の良いように宗教を変えてしまうことは、神様をまた仏様を信じるのではなく、利己的に利用していることに過ぎないのです。これは人間の弱さであり、不信仰で罪の行為なのです。

イエスキリストも法然も、より多くの人々が救済されるためにはどのように生きなければならぬのかを探求された方です。日本では高僧と言われている人た

ちは立派なお寺を持っていますが、法然はこのような寺は持っていませんでした。イエスキリストも両親の家はありますが、自分自身の家は持っていません。この点も 2 人に共通しているところです。だから、キリスト教も仏教も同じ宗教であるというのは乱暴な考え方だと神父は言っています。人間の救済は男女の区別なく、社会的な地位や経歴、経済状況など関係なく平等に救済の道は開かれているということで仏教もキリスト教も共通していますが、仏教を求めている人たちはその仏教の道を歩み、キリスト教を信じる人たちはその信仰の道を歩むのがあるべきそれぞれの信仰者の有り方であると井上神父は言っています。両方の道を同時に歩むことは信仰を持つものであるなら不可能な事であると断言しています。また、双方の宗教を誤りとか無意味な信仰であるとか批判することは、自分の信じている宗教をも否定することに繋がっているのではないか、お互いにそれぞれの信仰を尊重し、それぞれの信じる所によって祈り合うことが真の仏教徒、またキリスト教徒の姿なのだと伝えていきます。一つの宗教のみが正しいというのではなく、長い歴史の中で培われてきた宗教にはそれぞれ大切な、尊重すべき教えや考え方が有ることを認め合う、広い心が私たちには求められているのだと思います。この心が失われてしまうと、原理主義が台頭し、争いや、戦争が起きるのが私たちの歴史でした。未だに私たちの世界では真の平和な世界には程遠い道のりなのだと思います。この著作を通して日本人として育ち仏教の影響の強い環境のなかで、仏教そしてキリスト教を信仰することの尊さ、そして、それぞれに生きることについて喜びが与えられていることを感じる事が出来ます。キリストを信じる者として神様の豊かな祝福を改めて感じ取ることが出来たと私は思いました。